

サモア国立大学留学生を迎えての2009年度国際看護実習 — 学生の視点で考えた実習の成果 —

菊池郁希¹⁾, 竹村麻紀²⁾, 宮澤奈津美³⁾, 宮越幸代⁴⁾

【要 旨】 本研究の目的はサモア国立大学（以下、NUS）と長野県看護大学（以下、NCN）間の協定に基づき、2009年度にNUSの留学生2名を日本に迎え、NCN実習生3名と2週間実施した国際看護実習の内容をまとめ、学生の視点で考えた2009年度の国際看護実習の成果を検討することである。実習は老人保健施設でNCNとNUSの双方の実習生が2～3人1組となって1名の対象者を受け持つ体験や保健医療施設の視察などの方法で行われた。研究方法は実習終了後のNCN実習生によるグループディスカッションおよびこの実習での経験に基づいた各自の学びを整理した。実習生らにとって印象的なエピソードは8つに分類され、それらについて考察した結果、NCN実習生にとって本実習は、改めて自国の文化を認識し、異なる文化背景を持つ看護者同士が理解しあうプロセスや方法など、将来、国際協働や国際協力する際に必要な異文化看護の視点が養われる実習であった。

【キーワード】 国際看護, 国際看護実習, 異文化看護, 看護学生, サモア

I. はじめに

長野県看護大学（Nagano College of Nursing；以下、NCN）では2001年にサモア国立大学（National University of Samoa；以下、NUS）看護健康科学学部と学術交流協定を締結し、国際協力機構（Japan International Cooperation Agency；以下、JICA）との協賛によるサモアへの専門家派遣事業や学部教員の研修受け入れなどの事業が積極的に行なわれてきた。さらに2004年度からはNUSとの学生交流協定に基づき、4年次の総合実習（3単位）のひとつとして国際看護実習が開講された。

この国際看護実習では、1年ごとにNCNの学生3～4名とNUS看護健康科学学部の学生（以下、NUS留学生）2名が互いの大学を訪れ、そこを拠点に近隣の医療福祉施設に赴き、約2週間の実習を行なう。こ

の実習は2004年度のNCNの学生3名によるNUS訪問から始まり、2009年度で6年目を迎えた。この国際看護実習の目的は、開始当初より「異なる文化背景を持つ対象への看護実践の場や看護の提供を通し、社会システムや文化背景の違いが対象者の健康や看護実践にどのような影響を与えるかを学び、異文化看護の視点を養う」とされている。

筆者が参加した2009年度の実習は2名のNUS留学生をNCNに迎え、7月6日から7月18日までの2週間行われた。このNUSとNCNが共同で行う国際看護実習については、NCNがサモアに訪問した初回の国際看護実習に関する報告がある（小澤ら、2005）。また、NCN以外にも国内の看護大学や大学医学部、看護学部が行った海外での実習を報告する文献は散見されている。しかし、日本に他国の実習生を迎え入れ、日本の学生と共同で臨地実習を行うなどの実習に関する報

¹⁾ 虎の門病院, ²⁾ 長野中央病院, ³⁾ 健和会病院, ⁴⁾ 長野県看護大学
2010年9月30日受付
2011年2月2日受理

告はない。そこで、NUS留学生を受け入れる実習としては3回目を迎えた2009年度の国際看護実習で学んだことを整理し、学生の視点に基づき検討した成果を報告する。

て、その準備段階から実際に行われた実習内容、各学生の振り返りを整理し、学生の視点で考えた国際看護実習の成果を検討する。

II. 研究目的

2009年度にNCNで行われた国際看護実習について

1) 調査方法

「異文化看護の視点を養う」という実習の目的に基

III. 研究方法

表1 2009年度「国際看護実習」に参加した学生

大学	学生	性別	年齢	所属大学での学年	家族構成	社会経験の有無
NUS	A	F	26	3学年*	夫および長女(3歳)・夫の家族と同居	臨床での看護師経験あり
	B	M	24	2学年	両親およびきょうだいと同居	社会経験なし
NCN	C	F	21	4学年	独居・アパート	社会経験なし
	D	M	21		独居・アパート	社会経験なし
	E	M	25		両親およびきょうだいと同居	社会経験なし

*NUS看護健康科学部の最高学年

表2 2009年度「国際看護実習」の日程と内容

	実習日数	内 容	
		実習での活動	実習以外での活動
6日(月) 1日目	午前		前夜到着、学長・学部長表敬、生活準備
	午後	大学案内・実習オリエンテーション	NUS実習生学内歓迎会
7日(火) 2日目	午前	介護老人保健施設での実習1日目	
	午後	本学学生より日本国事情の発表・討論	
8日(水) 3日目	午前	介護老人保健施設での実習2日目	
	午後	NUS学生よりサモア国事情発表・討論	
9日(木) 4日目	午前	介護老人保健施設での実習3日目	
	午後	母親学級見学(調理実習)	
10日(金) 5日目	午前	地域基幹病院見学(健康診断センター)	
	午後		駒ヶ根市内散策
11日(土) 6日目	午前		駒ヶ根市内観光
	午後		休養・身辺整理
12日(日) 7日目	午前		休養・身辺整理
	午後		学部長主催NUS実習生夕食会
13日(月) 8日目	午前	国際看護実習学習成果報告会準備・ディスカッション	
	午後	「日本と海外の看護技術の違い」講義(実習担当教員)	
14日(火) 9日目	午前	国際看護実習学習成果報告会準備・ディスカッション	本学有志教員との交流昼食会
	午後	「看護感染学」演習参加	学長主催夕食会
15日(水) 10日目	午前	国際看護実習学習成果報告会準備・ディスカッション	
	午後	国際看護実習学習成果報告会	NUS実習生学内送別会
16日(木) 11日目	午前		駒ヶ根から東京・新宿へ移動
	午後	聖路加国際病院見学	
17日(金) 12日目	午前	東京都内案内	帰国準備
	午後		
18日(土) 13日目	午前	国際保健医療協力ワークショップ参加・ディスカッション(東京大学)	
	午後		NUS実習生は空港へ移動、出国

づき、異文化理解や異文化看護について考えるきっかけとなった実習中の場面を抽出・整理し、実習終了後のNCN実習生によるグループディスカッションの内容および匿名でのNCN実習生と教員との個人面談内容、NUS留学生による国際看護実習の振り返りレポート等を元に、学生の視点で考えた本実習の成果について考察した。なお、振り返りレポートのテーマと文字数は次の通りであった。

NCN実習生：「本実習を履修して学び得た内容および今後の自分の進路に活かしたいこと」（実習生毎にA4版用紙2-3枚以内で執筆）

NUS実習生：「Evaluation by NUS students」（2名で共同執筆、電子メールにファイル添付したレ

ポートを実習担当教員が受理。内容はNCNと同様のテーマで語数は任意。提出レポートの総語数は英語で765語であった）

2) 調査対象

2009年度の国際看護実習に参加したNCN実習生3名（女性）、NUS留学2名（Aさん 4年生 女性、Bさん 3年生 男性）の合計5名であり、その概要を表1に示した。

3) 調査期間

国際看護実習2009年7月6日～18日およびNCN実習生による実習終了後のグループディスカッション9月1日～2日の終了時まで

4) 倫理的配慮

表3 実習中のエピソード一覧

項目	区分	エピソードNo.	概要
異文化理解に関連した学び	本音と建て前	1	受け持ちの入所者K氏の発言の捉え方について意見が分かれた。K氏の「家族と離れて暮らすことが寂しくないわけではないが、今の生活には納得している」という発言について「日本人には本音と建て前という性質があり、発言している以上に寂しいという気持ちが含まれている可能性がある」と説明したが、Bさんはそれを理解できていない表情を示した。
		2	文化交流会で踊りを披露するためにBさんは民族衣装に裸足で集合した。サモアでは裸足になる習慣があっても既に3日目の実習であるため、施設内では靴を履くことをBさんが当然察していると考えた。しかし、いよいよ施設に入るという際にBさんが靴を持参していないことがわかり、Bさんには足の裏を十分に消毒した後、スリッパを履いてもらうことになった。
	察し	6	実習成果報告会に向けたディスカッションで、NCN実習生は自分たちの提案を行った際、NUS留学生が頷きながら聞いていたため自分たちの意図を察してくれたと期待したが、その直後の留学生の発言を聞いて実は全く理解されていなかったことに気づいた。
		7	ディスカッションの途中でポップミュージックを流すというBさんの行為に「あり得ない」と驚いたが「サモアでは当たり前のことかもしれない」と考え、その雰囲気壊さないためにその行為を黙認した。その逆に、別の場面でNCN実習生がとったソファの上で膝を抱え相手に足を向ける姿勢はサモアでは非礼な行動であったが、NUS留学生はその場ではそのことを伝えず後からやんわりと伝えてきた。
異文化背景をもつ看護者との協働に活かせる学び	遠慮	3	母親学級で試食を促された場面でNUS留学生は、周りの誰も食べ始めていないことに気づき、戸惑いの表情を見せながら食べるのをとどまった。その後、参加者らに合わせて自分たちも食べ始めた。
		8	前日の休憩時間に出されたコーヒーについて、実はモルモン教徒であるAさんは「カフェインを含んだものを口にしてはならないが、昨日は歓迎の気持ちで出してもらったものであったため飲んだ」と言った。
	医療現場における食品交換表や食品成分の表示	4	栄養指導の見学でNUS留学生は食品の単位交換表とその考え方が個々の指導に使用されていることにとっても関心を持った。病院食の試食料理に各食材の成分等が細かく表示されていることにも驚いていた。
	共通の関心である看護技術の根拠	5	血圧測定の際、対象者がどのような状態でも一律に200mmHgまで加圧するサモアに対して、平常時の血圧を確認しその値に20～30mmHgプラスした値まで加圧する日本の方法と根拠にNUS留学生は2人とも高い関心を示し、看護技術の違いを学べたことがこの実習の成果であるとレポートにも記述した。
	身体の清潔がもたらす意味の違い	9	東京での散策が終わり一旦宿舎に戻って再び外出する前に浴びたシャワーによって、NUS留学生は2人とも見違えるほどリフレッシュできた。しかし、翌朝は宿舎の規則でシャワーが浴びられなかったためAさんは「疲れた」と話した。

本研究にあたり、NCN実習生には文書を用いて口頭で本研究への参加は自由意思であること、研究に参加であっても不利益を被ることはないこと、研究への参加に同意しても途中で自由に参加を取りやめられること、研究結果は本研究の目的以外では使用しないことを説明した後、承諾書への本人の署名により協力の承諾を得た。NUS留学生には本研究代表者および国際看護実習担当教員がメールで本研究への協力の依頼を行ない、本人からの返信により承諾を得た。また、NCN実習生の「教員との個人面談内容」および「国際看護実習の振り返りレポート」は匿名で取り扱った。

IV. 国際看護実習の概要

1) 科目としての位置づけ

NCNでは国際看護実習に関する科目として2学年次の「異文化看護学」、「異文化看護演習」という必修科目がある。さらに3年次の選択科目として「国際看護学」が位置づけられ、4年次に「国際看護実習」を選択履修する学生は、この「国際看護学」を履修することが先修条件とされている。国際看護実習の履修を希望する学生には、書類および英語による個別面接での選考試験受験が義務付けられ、2009年度は3名の

履修が決定した。

2) 事前準備

NCNの3名の実習生は実習に先立ち、2009年3月から7月までの約5ヶ月間外国人講師による英会話の授業を10回程度、サモア語とサモア文化に関する講義を1回受けた。NUSの2名の実習生は看護健康科学学部に配属されたJICAシニアボランティアより、挨拶程度の日本語の学習およびサモアと大学に関するプレゼンテーション資料作成の指導を受けて来日した。

3) 実習における活動

2009年の国際看護実習の日程は表2に示した。「異文化看護の視点を養う」という実習の目的から、異文化理解や異文化看護について考えるきっかけとなった実習中の場面を抽出し、エピソードとして整理した結果を表3に示した。

i) 介護老人保健施設での実習

NCNの近隣にある介護老人保健施設で3日間、NUS留学生1名とNCN実習生1～2名が1組になり、各組で各1名の入所者を受け持った。具体的には図1に示した通り、入所者のH氏をNUS留学生のAさんとNCNの実習生E、K氏をNUS留学生のBさんと他のNCN実習生CとDの2名で受け持った。入所者への自

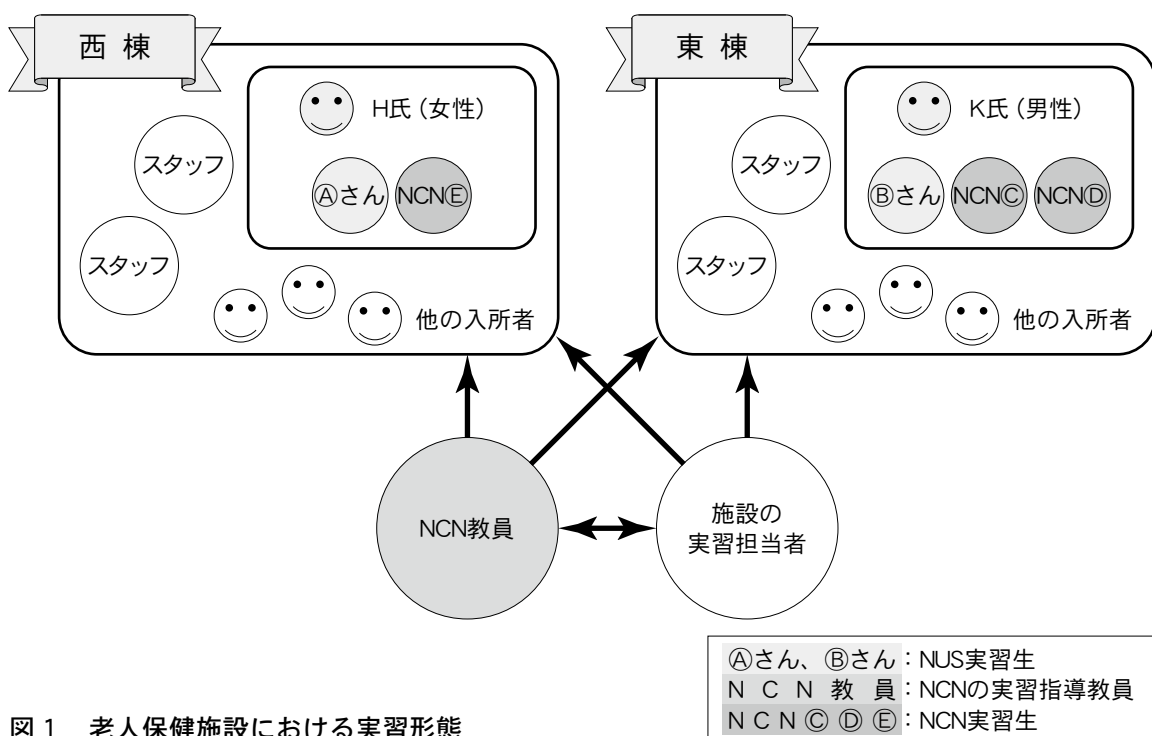


図1 老人保健施設における実習形態

己紹介の後、それぞれの受け持ち入所者のカルテやインタビューによる情報収集、バイタルサインズの測定を行ない、各組ごとにディスカッションし、対象者の健康課題の抽出をした。このディスカッションを通して、NCN実習生とNUS留学生とでは高齢者の身体的変化の特徴や社会的背景などを踏まえた高齢者の健康課題の捉え方はほとんど変わらないことがわかった。

エピソード 1：「本音と建て前」

健康課題の抽出の際にNCN実習生とNUS留学生であるBさんの間で、K氏の発言の捉え方について意見が分かれる場面があった。筆者はK氏の「入所しりハビリをしながら家族と離れて暮らすことが寂しくないわけではないが、今の生活には納得している」という発言について「日本人には本音と建て前という性質があり、発言している以上に寂しいという気持ちが含まれている可能性がある」と説明した。しかしBさんはそれに対して理解できていない表情をした。

エピソード 2：「察し」

この実習の最終日には施設内での「文化交流会」が催され、施設の全利用者と実習学生が互いに歌や踊りを発表することが企画された。NUS留学生はサモア伝統の踊りを発表するために2人とも民族衣装を身に付け、Bさんは裸足で集合場所に来た。しかしNCN実習生も教員もともに、サモアでは裸足になる習慣があっても既にこの実習は3日目であるため、実習の施設内では靴を履くことをBさんは当然察していると考えた。しかし、いよいよ施設に入るという際にBさんが靴を持参していないことがわかったため、Bさんには足の裏を十分に消毒してもらってから施設の許可を得て中に入り、スリッパを履いてもらうことになった。

ii) 母親学級の見学

実習4日目の午後は駒ヶ根市保健センター主催の母親学級を見学した。母親学級は2部構成になっており、第1部では妊産婦の歯科衛生をテーマに歯科医より講義があった。第2部は妊産婦の栄養指導・調理実習であり、栄養士による指導のもとに、母親学級の参加者と一緒に減塩の料理を作り、試食をした。

エピソード 3：「遠慮」

料理が完成した後、栄養士から試食を勧められた参加者たちは、1人ずつ皿に取って着席したが、周囲

の様子を伺い誰もすぐに食べ始めなかった。同時にNUS留学生も試食を促され一度はすぐに食べようとしたものの、周りの誰も食べ始めていないことに気づき、戸惑いの表情を見せながら食べるのをとどまった。その後、徐々に参加者たちが食べ始めたのに合わせて自分たちも食べ始めた。その食べることを一瞬とどまった思いこそが、日本文化を紹介した際にNUS留学生にとっては理解が難しかった「遠慮」という日本人特有の性質であることをNCN実習生が伝えると、NUS留学生は2人とも苦笑いしながら「なるほど」と頷いていた。

iii) 地域基幹病院の見学

実習5日目は、地域基幹病院で健康診断センター（以下、健診センター）の見学、健康診断体験、栄養士による糖尿病患者の栄養指導見学、病院食の試食を行なった。この病院はNCNのある駒ヶ根市の近隣4市町村の組合が設立した一般病床300床の総合病院である。

健診センターでNUS留学生が驚いた点は、健康な人が費用を払って健康診断を受け、疾病の予防に努めていることであった。それは日本で得た新たな学びであるとレポートにも記述していた。

エピソード 4：「医療現場における食品交換表や食品成分の表示」

栄養士による糖尿病患者への栄養指導の見学では、NUS留学生は食品の単位交換表を初めて知り、一つ一つの食品のカロリーを単位に換算したものが個々の栄養指導に使用されていることにとっても関心を持った。その後の病院食の試食場面でも、そこに添えられていた説明用紙に各食材および食品の分量やエネルギー、塩分などの成分が細かく算出され提示されていることを知ったNUS留学生は、その詳細な表示はサモアにはないものであると驚いていた。

iv) 学内講義・演習への参加

実習8日目の午後には国際看護実習担当のNCN教員より「日本と海外の看護技術の違い」についての講義を聞き、その後サモアと日本の看護技術に関して学生間でディスカッションを行なった。

エピソード 5：「共通の関心である看護技術の根拠」

看護技術の中でも特に話題になったのは、血圧測

定の方法であった。血圧測定の際、マンシュートにどのくらいの値まで加圧するのかという手技に関して、「サモアでは対象者が誰でもどのような状態でも200mmHgまで加圧している」とAさんもBさんも発言した。それに対し、NCN実習生は「日本では対象者に平常時の血圧を確認し、その値に20～30mmHgプラスした値まで加圧する」と説明した。その根拠として「加圧のし過ぎによる対象者の苦痛(強い緊縛による圧迫感や痛み等)を軽減するためである」と伝え、NUS留学生は2人とも「日本の看護技術の根拠をもっと知りたい」と高い関心を示した。

その他に日本とサモアの間で違いがあったのは、清拭の際に準備する湯の温度であった。NCNでは湯が準備や絞る操作で冷めることを考慮し、60℃程度のお湯を準備してタオルを絞れば、肌に当てるときにだいたいの患者が心地良く感じる38℃程度になると学んだ。一方、サモアでは清拭をする時間帯や天気、気温、対象者により準備するお湯の温度を変えており、朝や対象者が高齢者、乳幼児のときには温かいと感じる湯で、昼間や暑い日には水道の水をそのまま使うという違いがあった。NUS留学生はこのような看護技術の違いを学べたこともこの国際看護実習の成果であったとレポートに記述していた。

v) 学習成果報告会の準備

実習の10日目に学内で企画された学習成果報告会は、実習生全員が主体的に運営することが求められた。そこで、NCN実習生は準備がスムーズに進むようにするため、あらかじめNCNの実習生間で構成を考えていた。報告会の準備のためのディスカッションは実習4日目の午後から始め、その後8～10日目の午前にも行なった。

エピソード6:「察し」

初回のディスカッションでは、NCN実習生が事前考えた構成を提案し、介護老人保健施設での学びを改めて共有した。NUS留学生は2人ともこの提案を頷きながら聞いていたが、内容を十分に理解できていない表情であった。一方、NCN実習生はNUS留学生に自分たちの意図が、感覚的には伝わっていると期待した。ところがその直後示されたAさんの提案は、つい先ほどNCN実習生が説明したものとほぼ同

じであり、このときNCN実習生は自分たちの提案がNUS留学生に全く理解されていなかったことに気づいた。ディスカッションはこのように始めから順調ではなかったが、このときのAさんの提案を基に、発表にDVD映像を使用するなどのアウトラインを決めることができた。第2回目以降は、NUS留学生が主体となってパワーポイントを作成し始め、そのようなNUS留学生のペースにNCN実習生が合わせるかたちで進められた。

エピソード7:「察し」

さらに、ディスカッション中には互いの文化の違いを感じた別のエピソードもあった。ひとつは、途中でBさんがパソコンを通して自分の好きなロック歌手のポップミュージックを流し始めた場面である。発表準備に焦りを感じていたNCN実習生は、そのBさんの行為に、「正規の実習時間内に陽気な音楽を聞くなどあり得ない」と驚き、一瞬たじろいだ。しかし、「発表準備中でも音楽を聴くことはサモアでは当たり前のことであるのかもしれない」と思い、「それならば自分たちが感じたことを率直に伝えて関係が悪くなるよりも、そのままの雰囲気壊したくない」と考えて、Bさんの行為を黙認した。

また別の場面では、ディスカッション中にNCN実習生がソファに座り膝を抱えるという楽な姿勢をとったことがあった。それに対し、NUS留学生が後から「サモアにおいてその姿勢をすることは相手に足を向けるということであり、非礼な行動と捉えられる」とやんわりと伝えてきた。それを聞いたNCN実習生が自分たちの非礼を謝ると、NUS留学生は「もしサモアでその姿勢をされたら不快だけど、ここは日本なので失礼だとは思わなかった。ただ、サモアでは椅子に座って膝を抱える姿勢は非礼に捉えられるということを理解してほしかった」と言った。

4) その他

i) 休憩時間

エピソード8:「遠慮」

実習1日目の休憩時間には全員でホットコーヒーを飲んだ。次の日にAさんは「自分はモルモン教徒であるため、カフェインを含んだものを口にしてはならないが、昨日はこの大学で初めて歓迎の気持ちで出して

もらったものであったため飲んだ」と言った。その時初めて、事前にNUSから聞いていた2人の宗教（モルモン教ではないほかの宗教）に関する情報に誤りがあったことに気づいた。

ii) 東京都内散策

東京滞在中はバス・トイレが共同使用の公共宿舎に2泊した。この東京滞在は、私たち実習生同士が初めて1日中行動を共にする機会であった。また、NUS留学生にとっては、共同浴場の利用も生まれて初めての体験であった。

エピソード9:「身体の清潔がもたらす意味の違い」

生活習慣に関したエピソードとして、シャワーを行う意味が日本人とサモア人で異なると感じた場面があった。荷物を置くために一旦宿舎に戻り、夕食を食べるために再び外出する前に、NUS留学生は2人ともとても疲れた様子で「シャワーを浴びたい」と言った。そこでNCN実習生と担当教員は自分たちはシャワーを浴びず、2人のシャワーが終わるのを待つことにした。すると、シャワー後には2人とも清々しい表情に変わり、先ほどの疲れた様子から見違えるほどになっていた。また、翌朝は宿舎の規則でサモアでは習慣化している朝のシャワーが浴びられなかったのであるが、このことについてAさんは「朝、シャワーを浴びられなかったから疲れた」と話した。この発言を聞き、私たちは「1日の終わりにシャワーをするとリフレッシュしたり、朝からシャワーができないだけで疲れたと感じてしまうなど、サモア人にとってシャワーを浴びることは、単なる清潔行為だけでなくとても重要な意味があるのだ」と理解した。

V. 考 察

表3に示したエピソードを元に、「異文化看護の視点を養う」という実習の目的について考察する。

1) 異文化理解に関連した学び

これはエピソード1・2・3・6・7・8から考察した。日本にNUS留学生を迎えともに実習した経験は、NCN実習生にとって自分たちが持っている文化を客観視できる機会となった。その文化の特徴を表すキーワードは具体的に「本音と建て前」、「察し」、「遠

慮」であったと考えられ、これらの性質はNCN実習生とNUS留学生双方が意識していないところで実習中の随所に表れていた。

まず、介護老人保健施設での実習で健康課題を抽出する際に日本人の「本音と建て前」という性質がNUS留学生にうまく伝わっていなかったことにNCN実習生が気づいた場面（エピソード1）があった。NCN実習生は、この「本音と建て前」は日本文化を特徴的に示す性質と考え、事前の各国事情の発表の際、既にNUS留学生に説明しておいた。そのため、NCN実習生はBさんがそれを感覚的にでも理解してくれていると思い込んでいたが、実はBさんは全く理解していなかった。また、文化交流会の日にBさんが民族衣装を着て裸足で現れ、私たちに驚かせた場面（エピソード2）では、NCN実習生はサモア人が裸足になる習慣を承知しながら、その日は実習も既に3日目であったため、「施設内では靴を履く決まりが分かっているだろう」と、暗黙のうちに自分たちは留学生が日本の習慣を察してくれていることを期待していた。そのためその日、Bさんが靴を持たずに裸足で来るなどとは思いませんでしたので、大変驚いたのであった。さらに学習成果報告会の第1回目の準備の場面では（エピソード6）、自分たちの考えた報告会の構成をNUS留学生が察してくれることを無意識に期待していたが、それもNCN実習生の期待に反して実は伝わっていなかった。

これらの3つのエピソード場面では、NCN実習生は常に「このような場合はきっとこう感じてくれるはずだ、分かってくれるはずだ」と、最近の「空気を読む」という言葉で表されるような「察し」という日本人に特徴的な性質をNUS留学生にも無意識に期待していたのだと考えられた。

このように日本人に特徴的とも考えられる「本音と建て前」や「察し」という性質がNUS留学生にうまく伝わらなかったエピソードを元に、「物事を理解すること」の意味を考えてみたとき、筆者は「理解する」ということは「知識として頭で理解している」、「納得して心で理解している」、「行動として表せるほど理解している」という3つに分けられると考えた。そして、私たちはこの3つを満たしていることが確認でき

た時、真に「理解している」といえるのではないかと考えた。

「頭・心・行動の全てで理解している」ことが本当の意味で「理解している」ことだとすると、エピソード1でKさんの発言をきっかけに「本音と建て前」という性質をBさんに理解してもらえなかったのは、NCN実習生が行った説明だけでは、Bさんは日本人の特性に関する知識として頭では理解できても、「納得して心で理解する」というレベルにまでは至らなかったのだと思われた。

しかしその後、NUS留学生がとった無意識の行為から「察し」を行動レベルで理解できた偶発的な場面があった。それは、母親学級を見学した際、試食の時間にNUS留学生が周囲の母親たちが食べ始めない様子を見て自分たちの食べ始めるのをとどまった場面（エピソード3）であった。このときNUS留学生は、その場の雰囲気から「空気を読み」自分たちが取るべき行動をとっさに改めた。そして、その行動こそが「察し」であると私たちが説明したことで、その時初めて頭と心と行動によって日本人の「察し」という性質を「理解できた」様子であった。

しかし、その後の報告会のディスカッション中にBさんが音楽を流した場面（エピソード7）を照らし合わせて考えると、母親学級で一旦、試食を思い留まったエピソードの段階ではNUS留学生は2人ともまだ「察し」という文化を頭・心・行動の3つの段階全てにおいて理解していなかったのだと思われた。なぜならば、もしディスカッション中に音楽を流したBさんが、それに対して一瞬怪訝な表情を見せたNCN実習生の心情を察することができたのであれば、Bさんは音楽を流し続けられるはずがないと考えられたからである。

異文化理解に詳しい青木（2001）は、「私たちは生まれ育った文化の枠によって束縛される度合いがかなり強い」と述べている。それはつまり、NCN実習生が「察し」といった自分たちに特有の性質を、日本に初めて来て間もないNUS留学生に暗黙のうちに期待したり、そのような期待は文化の異なる相手には通用しにくいということを理解するのが難しいように、NUS留学生にとってもサモアと異なる文化や習慣に

についての説明を聞いて、たとえ頭や心でその場では理解したように見せても、実際の行動に示すのは難しいのであろう。

さらに、このように異文化に接触した際に、自分の文化にこだわったり、反対に必ず相手の文化に迎合しなければならないわけではないことがわかったエピソードがあった。それらは、Bさんが報告会の準備中に膝を抱えてソファに座ったNCN実習生に、後でサモアではそれは非礼な姿勢だとやんわりと伝えてきたエピソード（エピソード7）と、Aさんがモルモン教徒であっても初めて出されたコーヒーは飲み、その後カフェイン入りのものは飲めないことを伝えてきたエピソード（エピソード8）であった。このとき、NUS留学生は自分の文化を優先するよりもコーヒーを出してくれた相手の気持ちを思いやったり、自分の文化では非礼としてとられる態度も「今自分は異文化社会に身を置いているのだから」と考えることで、異なる文化を持つ者同士の対人関係のバランスをとったのではないだろうか。

つまりこれらのエピソードは、異文化背景を持つもの同士が頭・心・行動と、本当の意味で「理解しあう」ことの意味や難しさを学ぶ機会であった。そして、互いの文化を理解しあうためには、異なる文化を受け入れながらも、機会をみて自分の文化と異なる点をやんわりと伝えることで互いの理解を深められるのではないかと考えられた。

2) 異文化背景をもつ看護者との協働に活かせる学び

次に、NUS留学生との実習を通じて自分たちが今後、異文化的背景を持つ看護者同士の協働に活かせると考えられた経験についてエピソード4・5・9から考察する。

まず、地域基幹病院の見学でNUS留学生は食品の単位交換表や詳細な食品の成分表を見て驚いた（エピソード4）が、日本では糖尿病患者に食品の単位交換表を用いた栄養指導が一般的に行われている。そのため、私たちは世界的に食品交換表を用いた指導が行われていると思い込んでいたが、考えてみると食品交換表は「日本糖尿病学会」によって考案されたものである。また、日本では食事を1人分ずつ配膳する習慣があり食品の単位換算がしやすく、食品交換表の使用が

可能だと考えられた。一方、サモア人は大家族で、大皿に盛られた料理を各自がとりたい量を自分の皿にとって食べるため、サモアでの食品交換表の使用は難しいと考えられるが、NUS留学生が日本における食品の単位換算の考え方については、サモアの栄養指導や看護において何らかの参考にできる可能性もあると考えられた。

次に、「日本と海外の看護技術の違い」に関する講義とその後のディスカッションは、NCN実習生が常識と考えていた日本の看護技術とNUS留学生が捉えていた看護技術は異なることに気づく経験であった(エピソード5)。日本では近年、看護技術が根拠に基づいて教育されていることを知ったNUS留学生は、「もっと技術の根拠を知りたい」と希望した。NUS留学生にとって、日本では看護技術が科学的根拠に基づいて教育されていると知ったことはサモア以外の国で獲得した新しい学びであったと考える。NCN実習生はこのNUS留学生の看護技術の根拠に対する高い関心を知り、私たちがともに目指す看護の原理・原則に関わるこのような知識は国を超えた共通の関心であり、共有できることを認識できた。例えば、清拭で準備するお湯の温度はサモアと日本では異なっていたが、従来サモアで行われてきたように、そのときの気候や対象者の特性に合わせて清拭に使う湯の温度を変える方法で行うのが良いと考えられる場合もある。その他にも、シャワーを浴びることのもつ意味が私たちとNUS留学生とで異なっていたように、私たちの生活習慣や行動には生まれ育った文化の影響が大きかった(エピソード9)。

つまり、文化の異なる対象や場において看護を行う場合には、教えられてきた方法や根拠に加えて、その対象や場の文化背景を考慮して看護を行うことが重要であるといえる。それはつまり自分の固定した知識や方法が正しいと信じ込んでそれを相手に押しつけることではない。このような心構えは、今後私たちが看護師として国際協力に参加したり、日本で外国人看護師と協働する際に活かせる知識になったと確信している。

3) NUSとNCNが行う国際看護実習の特徴と意義

日本で行われる国際看護実習について文献検討した

結果、他大学の報告には、日本人学生が海外に行き、現地で語学を学ぶのに加えて病院などの施設見学をする内容のものが26件中、24件と最も多かった。聖隷クリストファー大学看護短期大学部では、アメリカでの実習で看護師の指導のもとに、患者へのケアを行なった報告があった(平野, 2004)。また、海外ではカナダのアルバータ大学で、個々の学生が教師と1対1で実習場所となる国を選定し学生の実習をサポートする方法、学生が選んだ国の教師からその国の看護や医療システムの講義を受ける方法、海外に実習に行く学生のグループに教員が同伴する方法の3種類のモデルが用意され、6～10週間の国際実習が行なわれていた(Judy E. Mill et al, 2005)。しかし、NUSとNCNのように、隔年で学生が協定を結んだ双方の大学を訪問し、双方の国の実習生が2～3人1組となって現地の対象者1名を受け持つ実習を行なう看護教育機関は文献では見当たらなかった。

2009年度の国際看護実習はNUS学生が日本を訪れ、日本人の対象者を受け持つ実習であったが、NCN実習生は日本人の性質や日本の文化などをNUS留学生に分かり易い英語を使って表現できる必要性を実感し、その機会を多く持つことができた。これは国内で留学生とともに参加する実習であったからこそ得られた経験であり、私たちは改めて異文化を持つ人の視点から改めて日本特有の文化を知り、それらを客観的に考えることができたと考える。また、国が異なる実習生が組になって対象者を受け持ち、一緒にアセスメントをするからこそお互いの看護技術や考え方の違い、生活背景やパーソナリティなどの対象の捉え方を学ぶことができた。

国際看護師協会(International Council of Nurses; ICN)が示す「看護師の倫理要綱(2005年改訂版)」によると、「看護ケアは、年齢、皮膚の色、信条、文化、障害や疾病、ジェンダー、性的指向、国籍、政治、人種、社会的地位を尊重するものであり、これらを理由に制約されるものではない」(国際看護師協会, 2006)と定義されており、私たちは日頃、対象の個別性に合わせて看護することを学習してきた。しかし、現在の看護基礎教育課程には、それらを実践的に学ぶ機会があるとはいえない。そのためNUSとNCNが共同して行

うこの国際看護実習を通して獲得できた異文化理解や国際的協働に活かせる実際的な学びこそ、今後、国内外の分け隔てなく広い視野を持って看護していく上で不可欠なのではないかと考えられた。

VI. おわりに

国際看護実習の目的と2009年度に自分たちが学んだ内容を照らし合わせると、NUS留学生にとってこの実習は、日本の社会や看護教育などのシステムの違い、そしてそれらが看護に影響を与えることを認識する機会となった。一方、実習に参加する前までNCN実習生にとっては、海外ではなく国内で行う国際看護実習ではその意味があまり感じられないとも思われたが、改めてこの実習を振り返ってみると、NUS留学生との交流や実習を通して自国の文化を認識し、異なる文化背景を持つ看護者同士が理解しあうプロセスや方法を実践的に学べる機会となったとすることができる。自分たちが実際に体験した個々のエピソードは、今後私たちが国内外で異なる文化的背景を持つ対象に看護を提供する際や異なる文化的背景を持つ看護者と協働する際の具体的な示唆を提示しており、それらがつまり、将来、国際協働や国際協力する際に必要な「異文化看護の視点」ではないかと考えられた。

国際化が進展する現代社会において、看護には今後ますます複雑で多様な人々を対象とした実践が求められると予想される。看護という職業を中心とした生涯にわたる経験(つまり私たちの「キャリア」となるもの)は、身近にある機会を活用し、それまでの世界から一歩ずつ踏み出すことで積み重ねられると考える。国際看護実習を通してその好機を得た私たちは、自分が踏み出したこの一歩が新しい知識や技術を生み、果てはそれが国際社会への貢献につながるべく、今後は臨地の看護専門職者として自分たちにできる努力を続けていきたい。

VII. 謝 辞

2009年度の国際看護実習の実施と本学への実習生の受け入れおよび本研究に協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

注 釈

- 注1) MEDLINE…MEDLARS Online (Medical Literature Analysis and Retrieval System Online). 医学を中心とする生命科学の文献情報を収集したオンライン・データベース。
- 注2) PsycINFO…American Psychological Associationが提供する心理学分野の文献データベース。
- 注3) CINAHL…EBSCO社の看護・健康学関連雑誌の記事を検索できる看護学の基本的データベース。Cumulative Index to Nursing and Allied Health Literatureの略。
- 注4) EBSCO… 学術雑誌論文を中心とした学術情報の全文、または文献データを検索して閲覧できるオンライン・データベースを運営する会社。

引用・参考文献

- 青木保(2001): 異文化理解, 岩波新書, 東京.
- 赤澤彌子(1999): 「国際看護論」の展開—米国海外研修を組み込んだ実践報告—, 看護教育, 40(3), 228-233.
- 遠藤芳子, 後藤順子, 市川禮子他(2004): 山形県立保健医療大学における看護学科国際交流事業の検討(第1報), 山形保健医療研究, 7, 67-73.
- 園城寺康子, 片岡弥恵子, 奥裕美他(2007): 学術交流協定による2006年度海外研修生受け入れプログラムの報告, 聖路加看護大学紀要, 33, 39-47.
- 濱畑章子, 片岡由美子, 米田雅彦他(2004): 看護学生の国際交流に関する意識調査, 愛知県立看護大学紀要, 10, 27-32.
- 平野美津子(2004): 看護学生のための海外研修—12年間の実践を振り返る—, 聖隷クリストファー大学

- 看護短期大学部紀要, 27, 49-59.
- 今村桃子, 齊藤博美(2000): 米国海外研修の実施状況と効果, 聖マリア学院紀要, 5, 91-93.
- International Council of Nurses(2006): The Code of Ethics for Nurses-preamble-, International Council of Nurses, Geneva(Switzerland).
- 入山茂美, 大石和代, 松本正(2007): フィリピン看護学実習の評価, インターナショナルナーシングレビュー, 30(5), 88-90.
- 入山茂美, 大石和代, 松本正(2008): 途上国における看護学実習のための事前学習の検討—フィリピン看護学実習の事前学習を振り返って—, 看護教育, 49(2), 144-148.
- 石崎弥生, 清水邦子, 石川かおり他(2002): 千葉大学看護学部-アラバマ大学間の国際交流, Quality Nursing, 8(6), 489-493.
- Judy E. Mill, Olive J. Yonge, Brenda L. Cameron (2005): Challenge and Opportunities of International Clinical Practica, International Journal of Nursing Education Scholarship, 2.
- 河合洋子, 森雅美(2004): シドニー大学看護学部での本学学生の研修—平成14年度研修の事前準備と実態—, 名古屋市立大学看護学部紀要, 4, 31-40.
- 片岡由美子(2006): 学生海外研修の概要とその課題—愛知県立看護大学生参加による研修の実施報告—, 愛知県立看護大学紀要, 12, 59-66.
- 北池正, 宮崎美砂子(2002): 日本の看護学教育における国際交流の実態と課題, Quality Nursing, 8(6), 476-479.
- 前原邦江, 杉下知子(2001): 海外短期研修, Quality Nursing, 7(6), 515-519.
- 望月好子, Inger - Margrethe Jensen, 堀喜久子(2005): 看護基礎教育における海外看護研修の効果—過去5年間のデンマーク看護研修の評価—, 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集, 15, 74-84.
- 森雅美, 生田克夫, 勝又正直他(2004): 名古屋市立大学看護学部とシドニー大学との学術交流—はじまりとその具体化作業—, 名古屋市立大学看護学部紀要, 4, 25-30.
- 森雅美, 河合洋子(2004): シドニー大学看護学部での本学学生の研修—平成14年度研修に対する参加学生の評価について—, 名古屋市立大学看護学部紀要, 4, 41-48.
- 長松康子, 田代順子, 菱沼典子他(2007): 海外ボランティアを行う看護学生向けサービスラーニングカリキュラムに必要な情報と支援策—タイのコミュニティにおけるボランティア活動を通じた学習体験評価—, 聖路加看護学会誌, 11(1), 62-67.
- 内藤直子, 當目雅代, 谷本公重他(2005): カルガリ大学看護学部生の第1回短期留学の意義と成果, 香川大学看護学雑誌, 9(1), 17-21.
- 中田りつ子, 成沢和子, 畔上真子他(2002): 海外短期研修の分析から国際看護学構築へ向けての一考察, 信州大学医療技術短期大学部紀要, 27, 25-40.
- 小澤杏奈, 藤岡好美, 結城美穂他(2005): 海外実習において看護学生が学んだサモアの文化と看護の特徴, 長野県看護大学紀要, 7, 21-30.
- 桜井礼子, Gerald Thomas Shirley(2001): 韓国との国際交流の一例—ソウル大学校看護大学との学生交流—, 大分看護科学研究, 2(2), 61-64.
- 佐山理絵, 高木廣文(2009): タイ, ラオス 専門教育のなかの海外研修 国際看護実習, 看護教育, 50(3), 256-259.
- 渡邊容子, 佐々木かほる, 上原真澄他(2002): 海外研修の学生評価とその効果: 質問紙調査の比較研究, 群馬県立医療短期大学紀要, 9, 89-101.
- 矢嶋和江, 矢島まさえ, 梅林圭子(2004): 国際保健活動論実習における学生の学びと今後の課題—カンボジア・タイのスタディツアーを通して—, 群馬パース学園短期大学紀要, 6(1), 73-84.
- 山田典子, 川内規会, 千葉たか子他(2007): 健康科学教育センター国際科の発展途上国における地域交流の現状—国際交流事業の教育的意義の検討—, 青森県立保健大学雑誌, 8(2), 267-273.

【Material】

The outcomes of international nursing practicum with students of National University of Samoa in 2009 : From the standpoint of the participating students

Yuki KIKUCHI ¹⁾, Maki TAKEMURA ²⁾, Natsumi MIYAZAWA ³⁾,
Sachiyo MIYAKOSHI ⁴⁾

¹⁾Toranomon hospital, ²⁾Nagano Chuo hospital, ³⁾Kenwakai hospital,
⁴⁾Nagano College of Nursing

【Abstract】 Pursuant to an agreement between The National University of Samoa (NUS) and Nagano College of Nursing (NCN), two exchange students from NUS came to Japan in the 2009 academic year to experience a two-week international nursing practicum done together with three NCN student nurses. The purpose of this research was to summarize the contents of this 2009 international nursing practicum, and evaluate its outcome from the standpoint of the participating students. The practicum took place in a nursing home, with the NCN and NUS student nurses combining with each other into groups of two-to-three students each to experience looking after one elderly client, and observe operation of healthcare facilities. The research method was to hold a group discussion with the NCN student nurses after the practicum completed, and for each student to summarize what she/he learned based on this experience. Memorable experiences for the student nurses were divided into 8 categories, and as a result of consideration of these 8 categories, this practicum fostered for the NCN student nurses a new awareness of the culture of their own country, and a viewpoint on transcultural nursing that will be necessary for future international collaboration and cooperation, such as the processes and methods for mutual understanding by nurses from different cultural backgrounds.

【Key words】 international nursing, international nursing practicum, transcultural nursing, nursing student, Samoa

宮越幸代
〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694番地
長野県看護大学国際看護学講座
Tel:0265-81-5153 Fax:0265-81-5153
Sachiyo Miyakoshi
Nagano College of Nursing
Akaho 1694, Komagane-shi, Nagano-ken, # 399-4117
Tel:0265-81-5153 Fax:0265-81-5153
E-mail:miyakoshi-sachiyo@nagano-nurs.ac.jp